

Title	ジョン・ラヴェル著 1870年から1914年に至るまでの波止場労働者とドック労働者 ; ロイ・グリーゴリー著 1906年から1914年までの炭坑夫とイギリスの政治
Sub Title	John Lovell, Stevedores and dockers, a study of trade unionism in the port of London, 1870-1914, 1969, London ; Roy Gregory, The miners and British politics, 1906-1914, 1968, Oxford
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1971
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.64, No.5 (1971. 5) ,p.347(113)- 349(115)
JaLC DOI	10.14991/001.19710501-0113
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19710501-0113

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

遅れること、およそ80年にして彼と同じように祖国を追われたロシアの革命家レーニンが住むことになり(1916年2月21日-1917年4月24日まで)、国こそ違えどビューヒナーの夢を引き継ぎ実現したことは歴史の織りなす因縁なのか、必然なのであろうか。

7

ここに紹介する『ゲオルク・ビューヒナー全集全一巻』(河出書房新社、1970年)は我が国においてビューヒナーを理解するための最良にして唯一の手引書であろう。本書の刊行を機縁にビューヒナー研究が隆盛の方向に進んで行くであろうことを信じて疑わない。本書出版のために関係された諸氏に心からその労をねぎらいたい。

さて、ここでゲオルクの弟、ルートヴィヒについて若干触れておきたい。彼は哲学の基礎を自然科学に置き、エネルギー不滅の法則をもって一切の現象を説明しようとする一人であった。彼の哲学上の地位はもとより大事であるが、また一方ではドイツ労働運動史上における存在も捨て去り難い面を持っている。つまり、第一次インターナショナル成立前後のドイツ労働運動における進歩的労働者党の指導的イデオログの一人であり、アルバート・ランゲ、ラサール共に、その名を見落せない。時代の背景こそ違わが兄弟共に大衆の側に立ったインテリゲンチアであった。

とまれ本書の刊行によってビューヒナー研究の基礎が築かれたことには違いない。新刊紹介の意味をこめて、つたない一文とする。

尚、筆者はビューヒナー、ヴァイディヒと本書で統一、使用されているところをビューヒナー、ワイディヒとした。ご了承いただきたい。

〈参考文献〉 —特に、社会、政治運動を中心に—

- 1) Adler, Georg, *Die Geschichte der ersten sozialpolitischen Arbeiterbewegung in Deutschland*. Breslau. 1885.
- 2) Fricke, Dieter, hrsg. v., *Die bürgerlichen Parteien in Deutschland*. Bd. I, II, Leipzig, 1968, 1970.
- 3) 平井新, 「パソウフ主義と秘密結社」, 三田学会雑誌 24 卷 6 号, 昭和 5 年.
- 4) 加田哲二, 『社会経済思想史』, 西欧篇, 慶応通信, 東京, 昭和 39 年.

注(30) 同上, 586 ページ。「ゲオルク・ビューヒナー小伝」参照。

5) Kowalski, Werner, *Vorgeschichte und Entstehung des Bundes der Gerechten*. Berlin, 1962.

6) Engels, Friedrich, *Deutsche Zustände*. I-III, in: *Mars/Engels Werke* Bd. 2, S. 564-S. 584. Berlin, 1970. 邦訳, 「ドイツの状態 I-III」マルクス=エンゲルス全集, 第 2 卷, 590 ページ~609 ページ, 大月書店, 東京.

7) Kössel, Paul, *Georg Büchner und die Gesellschaft der Menschenrechte*. Jena, 1963.

8) Mehring, Franz, *Geschichte der deutschen Sozialdemokratie*. Erster Teil. in: *Franz Mehring Gesamtelte Schriften*. Berlin, 1960.

足利末男, 平井俊彦, 林功三, 野村修共訳『ドイツ社会主義史』(上)ミネルヴァ書房, 京都, 1968 年.

9) Mihm, Karl, A. Fr. L. Weidig, Ein Beitrag zur Geschichte des vormärzlichen Liberalismus. in: *Archiv für hessische Geschichte und Altertumskunde*, Bd. XV, 1928.

10) Obermann, Karl, *Deutschland von 1815 bis 1849*. 3, überarbeitete Auflage, Berlin, 1967.

—, *Zur Frühgeschichte der deutschen Arbeiterbewegung (1833-1836)* in: *Beiträge zum neuen Geschichtsbild*. Zum 60. Geburtstag von Alfred Meusel, Berlin, 1956.

11) Schraepler, Ernst, *Quellen zur Geschichte der sozialen Frage in Deutschland*. Bd. I, 1800-1870. Göttingen 2. Auflage, 1960.

12) Shieder, Wolfgang, *Anfänge der deutschen Arbeiterbewegung—Die Auslandsvereine im Jahrzehnt nach der Julirevolution von 1830*. Stuttgart, 1963.

13) 島崎晴哉, 『ドイツ労働運動史』, 青木書店, 東京, 1968, 第 2 刷.

14) セレブリャコワ, 西本昭治訳, プロメテウス 1, 2, 『若きマルクス』 I, II, 新日本出版社, 東京, 1967.

15) Wermuth & Stieber, *Die Communisten-Verschöörungen des 19. Jahrhunderts*. 2 Bd. Berlin, 1853/1854.

(河出書房新社, 1970 年刊, A5, 628 頁+IX, 2, 900 円)

付記 本稿の執筆に際しては、平井 新、白井 厚両先生に多大の御世話をごちやうございました。ここに謝意を表します。

—1971. 2. 16.—

書 評

ジョン・ラヴェル著

『1870 年から 1914 年に至るまでの
波止場労働者とドック労働者』

John Lovell, *Stevedores and Dockers, A Study of Trade Unionism in the Port of London, 1870-1914*, 1969, London.

ロイ・グリーゴリー著

『1906 年から 1914 年までの
炭坑夫とイギリスの政治』

Roy Gregory, *The Miners and British Politics, 1906-1914*, 1968, Oxford.

1

ここにとりあげた 2 著は、イギリス独占資本主義形成期における労働運動を、それぞれ独自の立場と独特の観点から追求した実証的・歴史的な研究であり、独占資本主義段階における労働運動および労使関係の研究が、わが国において注目すべき問題としてクローズアップされている今日、われわれに示唆するところきわめて大きい。

ラヴェルはすでに、TUC(労働組合総評議会)の歴史の共著者としてもわが国に知られているが(B. C. Roberts and J. Lovell, *A Short History of the TUC*, 1968, London), ケント大学の社会・経済史学の講師の職にある。この研究は、従来しばしば、1889 年、かの歴史的な大ドック・ストライキによって、新組合運動の主役となった波止場およびドック労働者の組織について、1880 年以前にはその組織が存在しなかったということが通説とされてきたのになら、E. J. Hobsbawm の先駆的な研究などに刺激されつつ、1870 年代からの組織の状況およびドック労働者の状態を歴史的に叙述し、やがてそれが、1910 年代の労働運動の昂揚期に、全国合同波止場およびドック労働者組合に発展していく過程を、労使関係を中心として分析したものである。つぎのような内容から成っている。

- (1) 港 湾
- (2) 労働力
- (3) 1870 年から 89 年に至るもっとも初期の組合

(4) 1889 年の大ストライキ

(5) 分裂, 1889 年以後の労働組合運動

(6) 1911 年の大飛躍

(7) 1912 年のストライキ, その起源および余波, 結論。

著者はまず、「第 1 章港湾」において、ロンドン港の特徴を、つぎのようにとらえる。1850 年代のロンドン港は、East and West Indian, London, St. Katharines, Grand Surrey および Commercial Dock Companies の 5 大独占会社の掌中にあり、これらが相互に競合関係にあったことを指摘し、これが労使関係にあたえる影響から考察をはじめ。テムズ河の南北両岸およびロンドンに至る河岸は、多くのドックがなっているが、dock(波止場)と wharf(埠頭)との区別について、①後者は、大洋航海船をうけいれることはできず、前者に入ることになる。しかし②外国からの貨物をうけいれるのは、dock よりむしろ wharf であり、従ってそれらは、はしけで、dock から wharf へ運ばれる。そこで、wharf の方が、dock に対して圧倒的な優位に立つこととなる。蒸気機関の大型化にともなうドックの大型化、こうした変化は、1800 年から 1900 年にかけていちじるしくなり、East and West Indian Company と London Company との合併による企業の大規模化は、当然に、労使関係にもいちじるしい変化を及ぼすこととなったのである。労働力構造はきわめて複雑であるが、問題はその雇用構造にある。港湾労働は、原則として臨時雇用(casual employment)に依存し、きわめて少数の専門的な熟練労働者も除けば、大部分の労働者は、季節の変動あるいは景気変動に左右される完全な臨時労働者(complete casual)であった。季節的な繁忙と閑散の交替現象に対応するために、港湾労働市場は絶えず、労働力供給が過剰でなければならず、しかもそれがいつも待機姿勢で非流動的な形態で存在しなければならなかったのである(pp. 34-35)。このような労働市場の存在形態の特殊性の分析の上に立って著者は、ドック労働力を船上労働者(worker on the ship)と海岸労働者(worker on the shore)とに基本的にわけ、この両者の職務内容を分析し、前者の後者にたいする優越性とこれにともなう賃金格差の問題についてふれている。この点の分析は、いままで明らかにされることの少なかった問題であり、とくに歴史的な 1889 年のドック・ストライキに密接に関連するロンドンの雇用構造の特徴を、たとえばリヴァプールやニューヨークで行われたように、船舶所

有者や商人のために活躍する下請業者によって労働者が雇われるのは異なっており、貨物を船からおろし、倉庫におさめる作業は、直接にドック会社の監督下であり、「親方沖仲士」(master stevedores)によってなされたのである(p. 43)。すなわち、会社の直接的雇用の下にある船内労働者(shipworker)とその範囲外にある労働者にわけられるのであって、前者を'dock labourer'と呼び、後者を'quay labourer'と呼ぶのである。1889年のドック労働者は、この'dock labour'を中心としておこなわれたところに特徴があった。

著者は、労働力構造についてくわしい分析をしたもので、1870年から89年にかけての港湾労働者の初期労働組合組織の歴史について照明をあてるのであるが、この初期の運動と1889年以後の新組合運動との非連続性の原因は、前者が、ドック会社の支配とは一応独立した熟練労働者に近い沖仲士の組合運動であったのに反し、後者は実に未組織のドック労働者の運動であったことを強調している点に、この研究のもつ重要な意義があると思われる。

著者はさらに、1889年以後の新組合運動の昂揚の中で展開されるドック労働者の運動内部の矛盾、とくにdockers' unionとstevedores' unionとの関係、とくにstevedores' unionの分裂を中心とする組織の分裂についてのべ、さらに、「産業上の大不安」(Industrial Great Unrest)によって昂揚した1912年のストライキ、さらに産業別組合への動きなどについて注目している。

本書1889年のドック・ストライキによって象徴される新組合運動のうち、ドック労働組合の労働力構成、組織および政策について分析し、とくに1889年以前と以後の組織形態や運動方式の相異について克明に追求していることは、従来の研究に一步を進めたものとして高く評価されなければならないが、惜しむらくは、他の不熟練職種の労働者の運動や組織との関連や比較的分析がまったくなされていない点が問題である。

2

つぎにグレゴリーの業績「1906年から14年までの炭坑夫とイギリスの政治」は、労働党成立の年から第1次世界大戦の勃発までのきわめて短い期間、労働党成立のためにきわめて重要な役割を演じた炭坑労働者の組合が、一面においていかに強く自由党の浸透をうけていたか、炭坑労働者の政治動向をめぐる労働党と自由党との競合関係、そして保守党の脅威の前での友好関係、この点について、主として炭坑労働者の投票

傾向の分析を通じて明らかにしようとしたものであり、とくに地方間の特徴をうきぼりにしたものである。つぎのような内容から成っている。

- I. 炭坑夫の投票
- II. 自由=労働派の政治、袋小路
- III. 炭坑夫は曙光を認める
- IV. 変化の温床
- V. 先駆者
- VI. 後発者
- VII. のろま者
- VIII. 左への途

この書物を読んでもっとも印象的なことは、今世紀初頭、イギリス労働党成立期の炭坑労働者の政治動向が、いかに複雑であり、まさに曲折にみちみちていたものであったかということである。

われわれが普通に労働党の成立についてふれる場合、一般的につぎのようなイギリス労働運動の理解が暗黙の前提となっていた。それはおよそつぎのようであろう。1880年代から90年代にかけての不熟練労働者を主体とする新組合運動とこれにたいする社会主義運動の働きかけ、すなわち社会民主連盟やフェビアン協会および独立労働党(ILP)などの動きが、やがて労働党結成に導く基本線であり、とくにそのなかで、ILPは炭坑労働者を基盤として、もっとも大きな役割を果たし、労働者階級を自由主義から社会主義に転換させたという理解である。その証拠として、しばしば引き合いに出されるのは、1906年の総選挙において、労働代表委員会は、議席を4議席から29議席に増大させたという事実である。しかし問題は、これらの労働党議員が、自由党の影響を非常に強くうけていたために、労働党のその後の政策が、社会主義の理論的基礎をもちながらも、必ずしもこれに徹底しえなかったことである。労働党が、何故に、自由党の影響を脱して、社会主義政党への途を歩むことができなかったか。その大きな理由のひとつが、少くとも、炭坑労働者の政治動向を決定したものが自由党支持の傾向であったことは疑いえない。自由党の圧倒的勝利をもたらした1906年には、労働代表委員のほかに、自由党員として議席を得た24名の労働組合候補がいたが、そのうち13名は鉱夫であったという事実がある。このように、労働党の成立をめぐる労働組合と社会主義の問題はそれほど単純でないことである。まさしくこの重要な問題を、炭坑労働者の運動の面から解明したものが本書である。

一般に、炭坑労働者の間には、自由党の支持が圧倒的に強かったが、ランカシアやスタッフォードシアにおいては保守党の勢いが強固な基盤をもっていた(p. 4)。労働党の成立当時、炭坑労働者の組合にとっては、労働党は存在せず、自由党と保守党あるのみであった。ただ、炭坑夫の一部に、保守党にたいする根強い支持があったとしても、その影響力は限られており、それゆえに、非常に多くの炭坑労働組合の指導者たちは、自由党左派としてのリベラルズと協力関係を保つことができたのである(p. 5)。では何故に、自由党が、19世紀イギリス政治の脈絡のなかで、炭坑労働者にたいして特別な関心と魅力を抱いたのであろうか。何よりもまず、19世紀のイギリスは、炭坑労働者にとっては不満の巢窟であり、経済的窮乏、政治的無権利の状態そしてきびしい労働条件と危険の上もない劣悪な職場環境など、自由党急進派が、労働組合の掲げる諸要求を掲げて闘うことは比較的容易であった。第2に、それは宗教上の理由によっていた。炭坑夫は圧倒的に非国教派であり、これによって自由党は労働組合運動に浸透することができたし、社会主義理論や独立労働党に反感を抱いたのである。

このようにして自由党と炭坑労働者との関係は、きわめて密接であったが、その結びつきをより決定的にしたものは、労働者階級の世帯主にたいして選挙権を認めた1885年の第2次選挙法改正であった。この当時、炭坑労働者が候補者を立てる場合、大体つぎの3つのコースが考えられた。ひとつは、現議員の立候補に反対すること、つぎには現議員が自由党員であった場合には、説得して引退させ、炭坑労働者の候補者を出すこと、そして最後の手段としては、空席ができ、地方の自由党にその要求をおしつけることができるまで待つこと、以上3つの途が考えられたのである。このようにして、1890年代、炭坑労働者のみならず、イギリス労働運動全体が、政治行動の重要性を認識しはじめたときも、自由党への信頼は簡単に揺がなかったし、炭坑労働者の組合はとくにその傾向がみられた。たとえばその例として、大英国炭坑労働組合(Miners' Federation of Great Britain)の議長ベン・ピッカード(Ben Pickard)は、新しくできたLRCに同情をもたなかったし、MFGBもまたLRCに関心をもち、ピッカード等の指導部はひたすら自由党への浸透作戦を支持したのであった(pp. 23-25)。

炭坑労働者のこのような政治的志向を十分に理解せず、独立労働党(Independent Labour Party)は、その支部において労働党加入のよびかけを行ったため、たとえばダービシアやノッティンガムシアなどにおいては、自由=労働派は、その加入に反対する運動をおこし、MFGBの議長、ピッカードが、古い型の自由=労働派であったこともあり、労働党加入の問題は、はげしい意見の衝突をひきおこしたのであった。MFGBと労働党との関係が円滑なものとなったのは、1912年、炭坑労働者出身の老練な社会主義者ロバート・スマイリー(Robert Smillie)がMFGBの議長になってからであり、この時点から両者の関係はいちじるしく改善されたといわれる(p. 38)。もちろん、その頃すでに労働党の代表として、マクドナルド、ケーア・ハーディなどがMFGBと交渉して、勢力の拡大につとめつつあったけれども、しかし炭坑労働組合の自由党との協調は容易にやまなかった。

著者は以上のように、炭坑労働組合をめぐる自由党と労働党との関係を、主として自由=労働派(自由党左派)と労働組合との結びつきに対して、労働党と社会主義者との協力関係との対立矛盾という側面から、まことに克明に追求している。もちろん、このような自由党支持、自由=労働派への熱烈な支持は、次第にくずれていき、とくに炭坑の地理的条件の差異からする労働条件の格差の発生、非国教派の勢力の衰退など、炭坑夫の政治的意識の面にも次第に変化のきざしがあらわれたのであり、次第に社会主義への意識変革がなされていく。著者はそうした転換の先駆的な諸州として、ダーラムおよびノーサンバーランド、ランカシアおよびカンバーランドそしてスコットランドをあげ、おくれて転換をなしとげたものとして、ヨークシア、サウス・ウェールズ、さらにおくれないわば「のろま者」の州として、ダービシアとノッティンガムシア、スタッフォードシアとウォーウィックシアなどをあげて詳細に分析している。従来の労働党史研究に大きな反省を迫る力作であるといえよう。(Macmillan, 1969, A5, pp. 270, ¥4,860 and Oxford Univ. Press, 1968, A5, pp. 207, ¥2,260)

—1971・3・14 深更—

飯田 鼎